

ごあいさつ

この度、私ども特定非営利活動法人MCAサポートセンター（以下「MCA」）は、2025年3月31日をもって、コミュニティセンター進修館の指定管理事業から撤退することといたしました。10年の長きに亘って進修館に関われたことは、私どもにとって有意義なことでした。しかしながら、契約期間を1年残しての撤退となったことは、なんとも口惜しい限りです。

みなさまもご存じの通り、進修館は宮代町におけるコミュニティの中心となる施設として、1980年に開館しました。当時の宮代町長・齋藤甲馬氏は象設計集団に設計を依頼するにあたり「世界のどこもないもの」「子どもたちが成長したとき誇りをもって言える」「みんなが気軽に集まれる」施設として作ってほしい、と希望したそうです。その思いを受け、象設計集団の建築家たちは、宮代町の地勢、歴史、生活、地域で行われている活動の様子などを調べ、それを建物の意匠に取り入れました。言うなれば、進修館は宮代町を表現した建築です。「進修館は宮代町のシンボル建築だ」という言葉をよく耳にしますが、それは「有名な建築家集団が手掛けたユニークな建築」だけでなく、「宮代町そのものが表現されている建築」だからだといえます。

MCAが進修館の指定管理者となったのと時を同じくして、進修館に事務局をおいていた宮代町コミュニティ協議会（以下「コミ協」）が解散しました。町内各所にある個々のコミュニティをつなげる役割を持つコミ協事務局が進修館にあったことは、この建物に与えられた役割から、とても重要な意味を持っていたと考えています。コミ協という、地域コミュニティの横断的つながりの仕組みが進修館からなくなった状態から、いかに関係構築をして進修館をコミュニティの中心施設と位置付けるかということが、私どもMCAが指定管理事業を通じて考えてきたことでした。とはいえ、一施設の管理運営を通じてこの問いに答えを出すことは至難の業です。しかしながら、他でもない進修館だからこそ、地域を支え支えられる場になるべきとの思いで、様々な事業に取り組んできました。

そうした中、沖縄県今帰仁村のみなさまとのつながりが生まれました。今帰仁村は、同じく象設計集団が手掛けた中央公民館を有しており、この中央公民館を地域コミュニティの中心として再評価し活用しよう、という動きがあります。また施設管理においては、コンクリート建築の維持管理の難しさを実感する者同士。様々な共通点から意気投合し、交流が深まりました。何より感じたのは、象設計集団の建築理念である「自力建設」の考え方を大切にしているということでした。「自力建設」とは、単に具体的な建設を指すのではなく、自らの地域を、自らの手で作り上げてゆく哲学です。理想を掲げつつ、地域とともに考え進めていこうとする今帰仁村のみなさんの姿勢には、ことあるごとに刺激を受けました。そしてこの交流が、今帰仁村の舞踊集団を進修館に招聘して開催した「なきじんまつり in 進修館」につながりました。開催に当たっては、宮代町の地域コミュニティとの連携も取り入れたく、8町会連合会での民泊受け入れや、宮代町民俗舞踊連盟の協力による町民参加の「宮代音頭」演舞などを行いました。

MCAが当初掲げていた問いへの答えが、少しずつ形になりはじめた2024年度でしたが、大ホールが長らくコロナワクチン接種会場であったことによる顧客流出や、電気料金をはじめとする物価高騰などの影響は著しく、運営には公金の追加予算が必要な状況になりました。また進修館は元々、宮代町役場の別館として建てられたというルーツもあり、公用利用（役場事業による無料の施設利用）も多く、収益事業の計画を立てにくいという特性も重なり、私どもの法人から資金を捻出しつつの運営となっていました。2025年度の事業継続に当たり、予算に関して町との協議をしたものの交渉は難航し、このまま指定管理事業を継続した場合、当法人に多大な損失が生じると判断し、撤退を決断いたしました。

急な決定となったことで、多方面にわたりご迷惑をおかけすることになりましたことをお詫びいたします。また、当方からご挨拶が出来ておらず、本誌を以ってのお知らせになってしまっている方もおられます。

様々なご無礼につき、重ねてお詫び申し上げます。この10年、ご支援いただきましたこと、誠にありがとうございました。

特定非営利活動法人MCAサポートセンター 代表理事 渡邊朋子

まちの皆様にインタビュー！特別編

進修館を設計した象設計集団の建築家・富田玲子さんにとって、進修館はまるで家のように「帰るところ」という感覚があるそうです。それは、「入り口がたくさんあって、どこからでも挨拶もなしに入れりする」からだとか。人々を引き寄せ、和ませるこの建築の設計にあたって、富田さんはどのようなことを考えていらしたのでしょうか。象設計集団東京事務所を訪れ、お話を伺いました。

【何が必要で、何が足りないかを考える】

宮代町の初代町長齋藤甲馬氏は、象設計集団に設計を依頼するにあたり、「庁舎はボロでもいいが、町民の集会所には金をかけたい。みんなが使える、集まってきやすい公民館を立ててほしい。世界にひとつしかない建築をつくってほしい」と雲をつかむような話されたそうです。また、当時の宮代町役場の前の土地が造成されていること、ギャラリー、研修室、ホール、体育館もあり、町議会もできるような建物にしたいこともわかりました。何より「世界にひとつしかない建築」とは何なのか、様々な資料をあたったり、宮代町内の集会所の使われ方の調査をして、どのようなものが必要で、何が足りていないのかを考えたそうです。役場の職員やまちの人々、体育協会や文化団体の方など、これから施設を利用するであろう方々の話を聞き、必要なものを取り入れていったのだそうです。

【設計の軸を定める】

建築を設計する際、富田さんたちはたくさんスケッチを描き、また言葉を抽出して軸を決めていきます。この設計の軸が決

まるまではとても大変な作業ですが「決まってしまうと、どんどん発想が湧いてくるんです。」とおっしゃっていました。進修館の場合、みんなの居間、みんなの勉強部屋、みんなの台所、みんなの遊び場、などの言葉が抽出されました。また、世界の中心を定め、東西南北グリッドや富士山と筑波山を結ぶ線など、この土地だからこそその要素が取り入れられています。目に見えないものを形にするということは、並大抵のことではできません。またそれは、住んでいる人にとっては「あたりまえのこと」であるだけに、見つけることが難しいといえます。進修館を設計するためにその土地を歩き、そこにあるものを発見することの大変さを見ると、宮代町はそれを進修館という建築として表現してもらっているのだな…と、ありがたく感じます。

【風土を取り入れる】

象設計集団は建物の設計をするに際して、その土地や歴史などを調査し、デザインに取り入れています。進修館の場合、1970年代後半の宮代町の風景となっていた、屋敷林に囲まれた農家や美しい水田、ブドウ棚、あいまいな曲線を描く地形のひだなどが、それにあたります。屋上までブドウ棚が設置されているため、上から見ると建物と庭が屋敷林のようになっていきます。そして、進修館も町内に点在する屋敷林のひとつになるようにつくられているのです。

【お話を伺って】

開館して45年。富田さんは何度となく進修館を訪れています。そして、芝生広場を丸く囲むように座ってお弁当を食べてい

このコーナーでは、宮代町に在住・在勤・在学など宮代町に関わる方々にお話を伺っています。



富田さんは中学生の頃、ご実家のリフォーム計画を女性建築家第一号の浜口ミホさんが手掛けた際、「設計の力でこんなに変化が起こるなんて!」と感動したそう。その記憶が、ご自身も建築の世界に入るきっかけの一つとなったそうです。

るグループに話しかけたり、進修館ファンクラブのつといで会員のみなさんとの交流を楽しんでいただいています。お会いするたびに富田さんが「進修館に向かうとき、とてもワクワクするんですよ」とおっしゃるのは、きっと、ご自身が関わった進修館が使われている様子をご覧になるからなのでしょう。自身が設計した建築であっても、所有者がどのように使うのかは見守ることしかできないのだと感じます。富田さんをはじめ象設計集団の方々が「建物を出来たときのままに残してほしい」とおっしゃるのを聞いたことはありません。むしろ、どのように活用されていくのかを楽しみにしているように思えます。進修館の管理運営や象設計集団のみなさまとの交流、また今回の富田さんのお話を通して、「建物は、そこに関わる人がいてこそなのだ」と改めて感じました。



象設計集団東京事務所には「進修館だより」のバックナンバーが掲示されていました。感謝！



事務所の片隅には、こんなかわいらしいプレートが…。常に遊びゴコロがあるって、何だか素敵です。いつもおつかれさまです！



今回伺った象設計集団東京事務所のポスト。進修館の家具のデザインに似ていて何ともかわいらしい！